

## 陰茎に発症し再発を認めたグロムス腫瘍の1例

市立室蘭総合病院 泌尿器科

高杉尚吾 石井安彦  
佐藤英次 久滝俊博  
宮尾則臣

市立室蘭総合病院 病理部

小西康宏 今信一郎

### 要 旨

陰茎に発生し、切除後1年で同部に再発した有痛性の単発皮下腫瘍を経験した。組織学上グロムス腫瘍と診断した。陰茎に発生するグロムス腫瘍は非常にまれであり、世界で4例目の報告となる。2度目の手術後、再発を認めていないが、完全切除後も再発しやすいため、今後も再発に関しては注意深い経過観察が必要である。

### キーワード

陰茎 グロムス腫瘍

### 緒 言

グロムス腫瘍とはグロムス器官（動静脈吻合と同義）の腫瘤状の増生による比較的稀な良性腫瘍であり、思春期以降の若い成人の四肢、躯幹などに好発する。

今回我々は陰茎に発生し、切除後1年で再発したグロムス腫瘍の1例を経験したので報告する。

### 症 例

患者：62歳、男性

主訴：陰茎痛

家族歴：特になし

既往歴：特になし

現病歴：2000年頃より時折陰茎痛を認めたが放置していた。2003年8月疼痛が増強し、当科を受診した。視・触診では陰茎腹側皮下に13×11mmの可動性のある有痛性、充実性腫瘤を触知した。検査所見では、検尿ならびに尿沈渣に異常無く、採血にて若干の白血球分画の左方移動（好中球 83.3%）を認めたため、炎症性変化の可能性を考えCVA/AMPCを14日間投与するも改善なく、切除を目的に当科入院となった。

入院後経過：逆行性尿道造影にて尿道内腔の不整を認めず、陰茎皮下腫瘍の診断のもとに9月16日摘出手術を施行した。病理検査ではcapillary hemangiomaと診断された。術後経過に異常無く退院となった。

約1年を経過した2004年8月、再度陰茎痛を自覚したため再受診した。前回の手術部位に一致して直径約10mm

の可動性のある有痛性皮下腫瘤を認めた。前回の腫瘍の再発と考え、摘出手術を施行した。今回は一部尿道粘膜も含め完全切除とした。病理検査ではグロムス腫瘍と診断され（図）、前回の病理標本も再検討した結果グロムス腫瘍と修正された。術後経過は良好で、現在まで再発を認めていない。

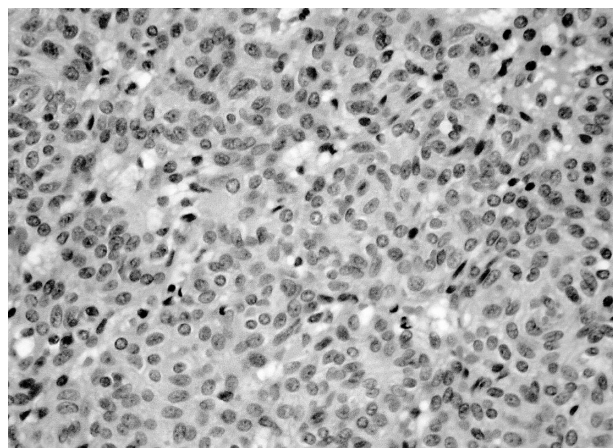


図 病理組織標本（H-E染色 ×400倍）

血管周囲に集積するグロムス細胞を認める。

### 考 察

グロムス腫瘍とはグロムス器官すなわち動静脈吻合（arterio venous anastomosis, AVA）が腫瘤状に増生したもの

であり、その名前はAVAに存在する類上皮細胞様の血管平滑筋細胞（グロムス細胞）に由来する。グロムス腫瘍は比較的若い成人に発生する良性腫瘍であり、爪の下に単発で発生する充実型、四肢、躯幹に発生する管腔型に分けられる<sup>1)</sup>。

陰茎に発生したグロムス腫瘍としては1939年にGrauerらが報告して以来、世界で4例目となる<sup>2)</sup>。ただし今までの報告では無痛性腫瘍として発見されており、今回の症例では激しい疼痛を自覚していた点が異なっている。本症例は病理学的には血管周囲に集積する血管平滑筋細胞（グロムス細胞）を認めており、充実型グロムス腫瘍と考えられた。

治療は腫瘍の完全切除とされている<sup>2)</sup>。自験例では同一部位に再発しており、初回の手術において完全切除がなされていなかった可能性があり反省すべき点である。しかし内田ら<sup>3)</sup>によればグロムス腫瘍全般において、完全切除後でも再発率は5～24%と報告されており、決して稀ではない。本症例では、2度目の手術時グロムス腫

瘍と診断していなかったが、良性腫瘍の切除1年後の局所再発であることから、完全切除を目的に尿道粘膜も含めて切除した。

## 結 語

今回、我々は陰茎に発生し、術後1年で再発したグロムス腫瘍を経験した。治療には完全切除が推奨されるが、切除後の再発は稀ではなく、継続した経過観察が求められる。

## 文 献

- 1) 今山修平：皮膚科MOOK，No13，今村貞夫ほか編，p212-219，金原出版，東京，1988.
- 2) Khouday KP, Nasrallah PF, Gordon DA: Glomus tumor of the penis. J Urol 155: 707, 1996.
- 3) 福永淳，上田正登，市橋正光，佐々木宗一郎：肘部に生じたGlomangiomaの1例．皮膚臨床 41: 1769-1771, 1999.